

武蔵野大学大学院 人間社会研究科 人間学専攻 言語聴覚コース

武蔵野大学 専攻科(言語聴覚士養成課程)

第3回武蔵野言語聴覚カンファレンス



平成30年3月17日(土)

12時55分

武蔵野キャンパス 6号館 6504教室

世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World



武蔵野大学大学院

第3回武蔵野言語聴覚カンファレンスによせて

大学院 人間社会研究科 人間学専攻 言語聴覚コース 教授／専攻科長
小嶋 知幸

本日は、「第3回 武蔵野言語聴覚カンファレンス」にお越し下さいまして本当に有難うございます。

昨日、大学院生3名・専攻科生9名が無事修了することができました。入学以来、学生が賜りましたご厚情に対しまして、この場をお借りして、改めて心から御礼申し上げます。

さて、第3回目の今回、私ども専任教員にとり、いささか感慨深く感じられる点は、まだわずかな人数ながら、巣立っていった卒業生達が一步ずつ前進してくれているのかなという実感です。実は今回、ご応募いただきました一般演題6題のうち、4題は第1期卒業生から出されたものです。このアニュアル・カンファレンス立ち上げの目的の1つである「卒後教育の場の創設」が、少しずつ実を結びつつあるようで、とても頼もしく思う次第です。

先に演題に関して言及してしまいましたが、今回も大きく3部構成となっています。例年同様、第1部が大学院修了生による研究成果報告、第2部が一般演題です。そして今回、第3部には「言語哲学と高次脳機能障害学」と題した特別セッションを企画致しました。

総合大学に付置された言語聴覚士養成コースという特徴を生かすべく、特別企画には毎回工夫を凝らしてきたつもりですが、今回もまた、本学ならではの企画と言えるものになったのではないかと少々自負しております。少なくとも、言語聴覚療法関連の研究会で、哲学者と言語聴覚士のコラボレーションといった(無謀な?)企画は、本学以外ではまずありえないと思うのですがいかがでしょうか。今回お招きしたのは人間科学部准教授の大谷弘先生です。先生はワイトゲンシュタインを専門とする新進気鋭の哲学者です。抄録にも書かせていただきましたが、このカンファレンスを立ち上げた時から、いつか大谷先生を招聘して特別企画をやりたいと思っておりましたので、今回その願いが叶ったことをとても嬉しく思っています。

また、今回も、プログラム終了後、粗餐をご用意させていただきました。短い時間ではありますが、ご参加の先生方との交流を深めることができれば幸いです。また、OB諸氏には、是非とも、新修了生・在校生諸君にエールを送って頂きたいと思っております。

最後になりましたが、今後とも武蔵野大学のST養成にお力添え賜りますようお願い申し上げます。どうぞ半日、楽しくお過ごしいただければと存じます。

第3回武蔵野言語聴覚カンファレンス プログラム

開会のご挨拶 (12:55)

小嶋 知幸

大学院修了生の研究報告 (13:00~14:00)

司会 小野 真理子

1. 通所介護(デイサービス)に言語聴覚士を配置することの意義について
大学院人間社会研究科人間学専攻 言語聴覚コース修了 金谷 勇歩
2. 失語症者の社会参加に至る契機と言語聴覚士に期待される役割の検討
大学院人間社会研究科人間学専攻 言語聴覚コース修了 温泉 千春
3. Interactive Metronome® の有用性の検討—健常成人を対象にした基準値の作成
大学院人間社会研究科人間学専攻 言語聴覚コース修了 大野 南

休憩(10分)

一般演題 (14:10~15:40)

司会 畠山 恵、狐塚 順子

1. 右頭頂葉皮質下出血により道順障害を呈した一例—回復期リハビリテーションでの2か月間の経過
国立病院機構村山医療センター 池田 美夏
2. 失文法の評価に関する言語横断的文献研究
竹田総合病院 ○裴 雅蓮、阿久津由紀子
3. 誤嚥性肺炎の診断で急性期病院に入院した患者の経過—経口摂取への取り組みを中心として—
公立昭和病院 ○新 寿美、日向 礼子、岡田 真明
4. 失語症者の発話に伴う身振り—身振りと概念化に関する認知言語学的考察—
武蔵野徳洲会病院 伊藤 敬市
5. 失語症季節会の取り組み~QOL向上へのアプローチ~
北原国際病院 植村 聡子
6. 名詞に比し動詞に強い喚語障害を認めた二方向性失名詞の一例
茨城リハビリテーション病院(旧 会田記念リハビリテーション病院) 片岡 丈了

休憩(10分)

特別企画—「言語哲学と高次脳機能障害学」 (15:50

~17:00) 司会 小嶋 知幸

キーノート「世界について語るとはどういうことか—ワイトゲンシュタインの言語哲学」

武蔵野大学人間科学部 大谷 弘

トークセッション

武蔵野大学人間科学部 大谷 弘

武蔵野大学大学院人間社会研究科 小嶋 知幸

閉会のご挨拶 (17:00)

小嶋 知幸

懇親会(17:15~18:45)

大学院修士生の研究報告

1. 通所介護(デイサービス)に言語聴覚士配置することの意義について

金谷 勇歩

デイサービスは、その事業所数や施策上の動向において期待されながら、STの配置数が少ない。本研究では、デイサービスにSTを配置する意義を明らかにすることを目的とした。

認知・嚥下・コミュニケーションについて、ST配置及びST未配置のデイサービスにおける、要介護高齢者58名の2時点間の機能の変化を調査した(調査1)。ST配置により機能が維持される可能性が示唆された。また、サービス提供者10名への聞き取り(調査2)からは、STが専門性を発揮しデイサービスで活躍している実態が明らかになった。しかし、嚥下面への運動機能の影響は明らかにできず、さらにリハビリプログラムやスタッフへの教育面の検証は、今後の課題となった。

2. 失語症者の社会参加に至る契機と言語聴覚士に期待される役割の検討

温泉 千春

失語症者は「社会参加」をリハビリの目標としていることが多く、失語症者のQOLの向上には社会参加支援が重要であると考えられる。本研究は、社会参加を果たしている失語症者・家族にインタビューを行い、社会参加に至った契機及びSTの役割を検討することを目的とした。

社会参加に至った契機には、失語症者本人に関わる要因と周囲の人に関わる要因が挙げられた。失語症者および家族は日常生活に汎化されるリハビリを望んでおり、失語症者への長期的なリハビリの実施は重要であると思われる。

3. Interactive Metronome® の有用性の検討: 健常成人を対象にした基準値の作成

大野 南

Interactive Metronome (IM)とは、音楽用メトロノームに合わせてタッピングを行い、メトロノーム音とのタイミングのずれを、ミリ秒単位でフィードバックする装置で、米国を中心に注意改善のトレーニングとして応用されているという。そこで本研究ではIMの有用性を検証する目的として、29名の20~30歳代の若年群と40~50歳代の中年群の健常成人を対象に、IMの課題を2種類3セット実施し、記述統計量・年齢差・反復効果の有無・性差・変動性などを集計・分析した。その結果、年齢群間の差を認め、IMスコアは加齢の影響を受けることが示唆された。

一般演題 抄録

1. 右頭頂葉皮質下出血により道順障害を呈した一例

—回復期リハビリテーションでの約2か月間の経過—

国立病院機構村山医療センター 池田 美夏

症例は60代男性右利き。右頭頂葉内側に皮質下出血を認め、リハビリ目的で当院に入院した。各種検査では視覚性の課題で点数が低かったが、全般的な認知は保たれていた。熟知した建物の同定や新規の場所認知は良好も、見えない範囲での建物の位置想起や2点間の道順の口述は困難という道順障害の所見が認められた。約2か月間の介入により病院内移動は見守り必須の状態から、特定の場所に限り自立となった。また各種検査では視覚性課題の点数は改善した。しかし見えない範囲での建物の位置想起や2点間の道順の口述は困難で、新規の場所では道に迷う可能性が残された。

道順障害は脳梁膨大部後域から楔前部が責任病巣と考えられており本症例は関連が示唆された。道順障害の報告例は少なく、今後の症例を蓄積・検討することが重要である。

2. 失文法の評価に関する言語横断的文献研究

竹田総合病院 ○裴 雅蓮、阿久津由紀子

【背景】失文法の評価を交差言語的に比較、検証した先行研究は少ない。

【方法】文献検索には、PubMed(英語)、医中誌(日本語)、CNKI(中国語)の3つのデータベースを用いた。PICOSに準じて、「英語、日本語、中国語における失文法の症状と評価法に関する研究結果を比較する」という臨床疑問を形成した。英語、日本語、中国語の各言語で、P: 失文法障害を有する患者、I: 評価、C and O: 特定せず、S: 症例報告以外、と設定した検索式による文献検索を行った。

【結果】スクリーニングにより53篇が選定され、その内、PPAIに関する論文は16篇(PubMed 14篇、医中誌2篇)、口頭の文産出能力を評価対象とする論文は16篇(PubMed 6篇、医中誌10篇)選定されたが、中国語の論文はなかった。

【考察】中国語圏では文産出能力の評価、および認知症における失語症に関する研究の空白がわかった。

3. 誤嚥性肺炎の診断で急性期病院に入院した患者の経過—経口摂取への取り組みを中心として—

公立昭和病院 ○新 寿美、日向 礼子、岡田 真明

2017年1月から9月の間、当院に誤嚥性肺炎の診断で入院し嚥下機能の評価・加療目的でのST依頼のあった患者は56名に上った。これらの患者を対象に、年齢・性別・ST介入日数・経口摂取に至った日数・食事形態・BI等のリハビリ関連因子を集計し、ST加療を行った誤嚥性肺炎患者の回復過程につき検討した。又、上記対象患者のうち、当院の多職種連携体制が著効を奏した一例を提示する。早期介入・経口摂取の早期開始が在院期間の短縮に繋がる可能性が考えられた。

一般演題 抄録

4. 失語症者の発話に伴う身振り—身振りと概念化に関する認知言語学的考察—

武蔵野徳洲会病院 伊藤 敬市

【はじめに】身振りが発話に及ぼす影響について認知言語学的枠組みで検討した。

【理論的背景】「探索活動」とは生物が外界の情報を得るために環境へ能動的に働きかける過程である (Gibson, 1966)、本多 (2005) は探索活動によって得られた知覚の変化が発話における「仮想変化表現」に反映されると指摘している。

【方法】漫画再生課題における身振りの形状、仮想変化表現の有無、身振りと仮想変化表現の前後関係を分析した。

【対象】失語症者1名 (対象1)、健常成人28名

【結果】対象1は発話に難渋したが徐々に微細な手の動きが出現し、明確な手の動きに追従するように仮想変化表現が表出された。健常成人では仮想変化表現と身振りが共起しやすく、身振り先行の場合が多かった。

【考察】対象1では手の動きが知覚の変化をもたらす仮想変化表現を促進した、すなわち身振りが探索活動として機能した可能性が示唆された。健常成人でも仮説と矛盾しない結果が得られた。

5. 失語症季節会の取り組み～QOL向上へのアプローチ～

北原国際病院 植村 聡子

【はじめに】失語症に対するグループ訓練は「レクリエーション的内容を主体として社会適応性の向上や心理的改善を目的としたものと、実用的コミュニケーション能力の向上を主たる目的としたもの」に大別される (1996横張)。当院で実施している失語症季節会「みちくさ」は上記目的の、「社会適応性の向上や心理的改善」を図り、QOL向上に繋がる活動として位置づけられる。

【失語症季節会「みちくさ」とは】失語症季節会「みちくさ」は外来言語療法に通院されている失語症患者様、およびご家族様を対象としたグループとして平成15年に発足。年4回、季節ごとに開催している約15年間継続している活動である。

【活動内容】参加者のリクエストにて年間活動を決定しており、制作、運動、ゲーム、言語活動などの中心に実施。アクティビティとは別に音楽活動もプログラムされている。

【QOL向上へのアプローチ】活動を通じて参加者及びご家族間の交流機会を確保。自己紹介や近況報告の時間を作り、事前に話す内容を意識し検討して頂けるよう促しを実施。また様々な活動を取り入れ、成功体験を得られるよう設定。更に可能な参加者には、会運営の役割を担当して頂くよう促しを行っている。

【季節会開催効果】季節会を通じ、患者様同士の顔見知りも増え、交流の場としての役割を確立出来ている。病期や、重症度に制限を持たせず、広く受け入れることで、様々な参加者の交流を促し、病期の浅い参加者が経験談を聴取するなど、多様なニーズに対応。多くの活動を取り入れるだけでなく、参加者に役割を拡大することで、参加目的や役割意識を生み出し、日々の生活における趣味の再獲得や再開の一助となっている。これらのアプローチを通じて孤立感を軽減させ、社会適応性向上と心理面改善を図り、結果としてICF分類における「活動」「参加」を充実させQOL向上に繋げることが出来ている。

一般演題 抄録

6.名詞に比し動詞に強い喚語障害を認めた二方向性失名詞の一例

茨城リハビリテーション病院(旧 会田記念リハビリテーション病院) 片岡 丈了

【症例】40代・男性・右手利き・教育年数12年【現病歴】X年交通外傷により受傷。左硬膜下血腫、左側頭葉脳挫傷を認め開頭血腫除去術施行。X+2ヵ月当院転入院。

【神経学的所見】特記すべき所見は認めない(独歩でADL自立)。

【言語所見】入院時、理解は単語レベルより不確実で語義理解障害を認めた。呼称と漢字の音読は困難で、復唱と仮名の音読が比較的有効であった。X+7ヶ月では、SLTA口頭命令が4/10と理解面の改善を認め、発話においてもSLTA呼称19/20、TLPA名詞表出検査30/40と改善を認めた。一方、動詞はSLTA動作説明6/10、TLPA動詞表出検査8/40であり、動詞の呼称に難渋を示した。

【考察】時間的経過に伴い、名詞呼称の成績は大幅に改善したのに対し、動詞呼称成績の改善は小幅に留まった。名詞と動詞の間での喚語能力の差が明らかであり、以上より動詞における品詞特異性呼称障害が示唆された。

【MEMO】

特別企画—トークセッション—

言語哲学と高次脳機能障害学

「世界について語るとはどういうことか—ウィトゲンシュタインの言語哲学」

武蔵野大学 人間科学部 准教授 大谷 弘

20世紀を代表する哲学者、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein)は言語について二つの対比的な考え方を提示している。第一の、いわゆる前期ウィトゲンシュタインの言語哲学においては、言葉の働きは世界の中の事態を記述することにその本質があるとされた。これに対し、第二の考え方、後期ウィトゲンシュタインの言語哲学においては、我々が言葉を使用するという側面が強調される。後期ウィトゲンシュタインによると、世界の記述を含めた言葉の機能は、我々の実践、生活のあり方を背景として成立するのであり、そのような背景に織り込まれた言葉の使用を理解することが、言葉の機能を理解することにとって重要なのである。

本講演においては、以上のようなウィトゲンシュタインの言語哲学を、その哲学的な背景を含めて紹介し、特に世界の記述という言葉の機能について哲学的に議論することとしたい。

「トークセッションによせて」

武蔵野大学専攻科/大学院人間社会研究科 小嶋 知幸

私がおはじめてウィトゲンシュタインの名前を知ったのは、実に約40年前、大学2年の時に履修した「英米哲学演習(西勝忠男先生)」であったと記憶しています。ただしそれは、1年次に第二外国語の履修を怠ったため、独仏語系の演習の敷居が高く、参加する勇気がなかっただけという、実に情けない理由によるものです。

時代は一気に下りますが、10年ほど前、故大東祥孝先生と失語症について雑談させていただいていた折に、先生の口からその名前が出たことが非常に印象的で、以来、少しでも大東先生の神経心理学ならびに精神医学の思想を理解したいという思いから、折に触れ、改めてウィトゲンシュタインの解説書などを手にするようになりました。そして4年前、本学に赴任した折、所属の人間科学部の専任教員の中に、ウィトゲンシュタイン研究者がいらっしゃることを知ったときには、ご縁というものを感じずにはいられませんでした。このカンファレンスを立ち上げた時から、近い将来必ず大谷先生をお呼びしたいと考えておりましたが、今回、第3回目にして念願が叶ったことを本当に嬉しく思っています。

当日は、大谷先生の基調講演の後、私が、ウィトゲンシュタインの言語哲学の中から、失語症・高次脳機能障害を読み解く上でヒントになるのではないか、と思われるトピックをいくつか取り上げ、私なりの自己流の解釈の是非を専門家である大谷先生に正していただくとともに、会場の皆様からも忌憚のないご意見を伺いたいと考えています。私にとってはまさに「異種格闘技戦」になりますが、前日ぎりぎりまで準備しよう思っています。

[略歴]

大谷 弘(おおたに ひろし)

東京大学文学部思想文化学科 卒業

東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻 博士(文学)

2010年より武蔵野大学人間関係学部講師、2017年より同大学人間科学部准教授

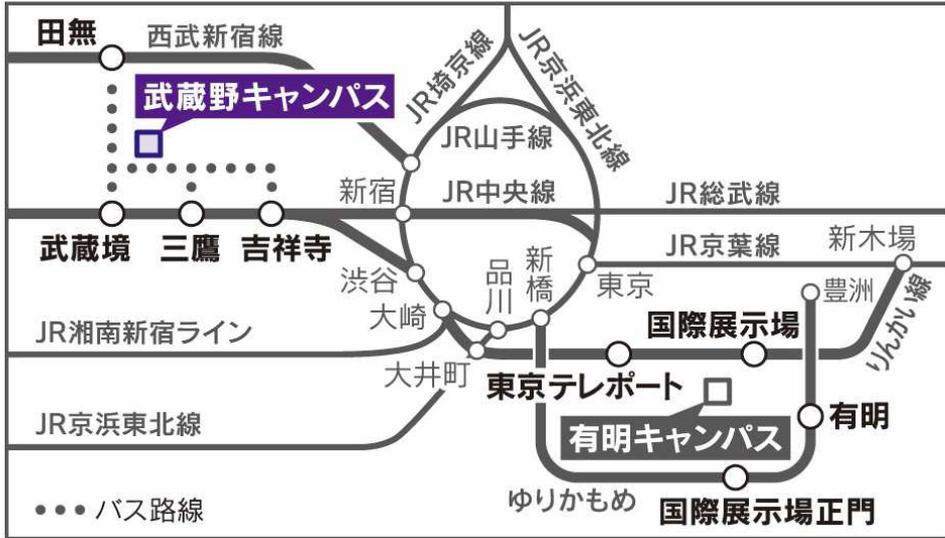
第4回武蔵野言語聴覚カンファレンス —開設5周年記念シンポジウムのお知らせ—

今回は、当コース開設5周年を記念してシンポジウムを予定しております。テーマは「小児の高次脳機能障害(仮題)」です。狐塚順子准教授の基調講演を軸に、魅力ある会にしたいと思っております。皆様のご参加をお待ちしております。

日時：平成31年3月21日(水祝)

場所：東急REIホテル吉祥寺

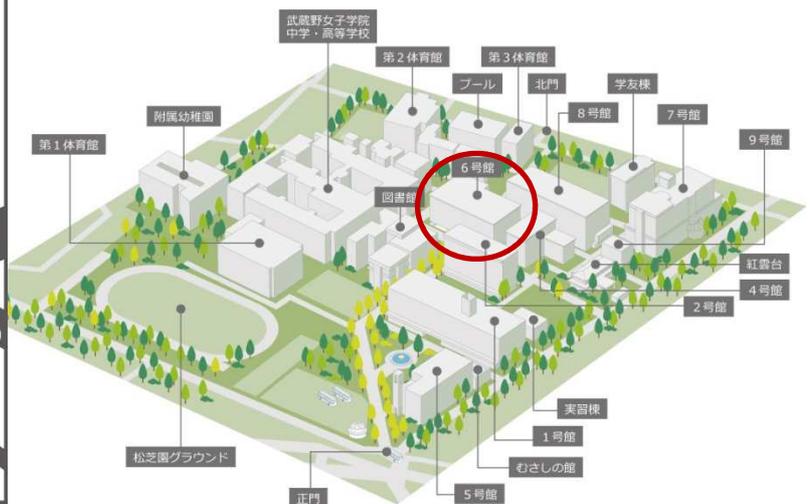
ご案内



JR(中央線・総武線)・地下鉄東西線・京王井の頭線

武蔵境駅 北口バス③ 三鷹駅行、武蔵野営業所行バス約7分「武蔵野大学」下車	三鷹駅 北口バス③ 武蔵野大学行、武蔵境駅行、武蔵小金井駅行、ヴィーガーデン西東京行バス約10分「武蔵野大学」下車	吉祥寺駅 北口バス① 向台町5丁目行、桜堤団地行バス約15分「武蔵野大学」下車
西武新宿線		西武池袋線
田無駅 北口バス⑤ 武蔵境駅行バス約5分「至誠学舎東京前」下車、徒歩5分	ひばりヶ丘駅 南口バス① 武蔵境駅行バス約20分「至誠学舎東京前」下車、徒歩5分	

※上記のうち、直行バスも運行されている三鷹駅での下車が便利です。



【会場】 武蔵野大学 武蔵野キャンパス 6号館5階6504教室

〒202-8585 東京都西東京市新町1-1-20

【受付】 受付開始 12:30

【参加費】 一般 ￥500 学生 無料

【武蔵野言語聴覚カンファレンス(MGC)事務局】

学校法人武蔵野大学 大学事務部 武蔵野学部事務室 言語聴覚事務担当

所在地: 〒202-8585 東京都西東京市新町1-1-20

TEL: 042-468-3350(月～金 8:45～17:00)

Mail: speech@musashino-u.ac.jp

* お問い合わせはメールにてお願い申し上げます。